

キーワード分析を用いた大学生の進路探索に関する研究

わた なべ ゆう き
渡 邊 由 己

〈要 旨〉

大学生の進路探索に関する価値やイメージの構造を、チャンス発見学の手法を用いて検討した。データは進路探索期にある大学2年生～3年生前期を対象として調査により収集され、進路を考える上で重視することをキーワードで回答を求めた。分析は、語の共起性からネットワーク図を生成するKeyGraphを用いておこなわれた。進路探索の価値やイメージとして中核的な概念は「収入」、「休暇」、「安定」、「時間」、「人間関係」から構成され、それらと関係するキーワードも含め全体で40語からなるネットワークが解釈可能なものとして抽出された。このネットワークに基づき、大学生の進路探索に関する価値やイメージの構造解釈と、KeyGraphによる分析を進路探索促進につなげる手法について検討した。

〈キーワード〉

大学生, 進路探索, チャンス発見, ネットワーク

I. 問題と目的

1. はじめに

大学生のキャリア探索は卒業後の進路探索を中心に進められる。近年は、2008年にアメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズがサブプライムローン問題により破綻し、その影響が日本にも及ぶなどして2000年代初頭からのいわゆる「いざなぎ景気」から不況状態に転じた。このため新規雇用の枠が縮小して、大学生の積極的な進路探索を促すことの重要性が高まっていた。しかしながら最近に至って大学生を取り巻く雇用状況は好転のきざしが見られている。厚生労働省(2016)⁵⁾により発表された2016年4月1日時点での大学の就職率は97.3%であり、就職率の推移では前年同時期を0.6ポイント、一昨年同時期を2.9ポイント上回っている。さらに近年で就職率が最も低かった2011年同時期の就職率91.0%からは年々上昇している。このように環境的要因としての雇用状況は改善してきているが、例えば安達(2007)¹⁾によるフリーターの研究から、フリーターの

メリットやデメリットに関する結果期待がフリーターに対する肯定的態度と否定的態度を決定しうることが示されたように、大学生の勤労や就労に対する価値観は多様であり、大学生のキャリア探索を環境的要因と内面的要因で一律に分断せず、大学生自身が主観的に感じる様々な要因の相互作用として理解していく必要がある。

2. 大学生のキャリア発達段階とキャリア探索

大学生のキャリア探索を扱った、キャリア発達のプロセスに関する心理学的理論はいくつか存在する。Super, Savickas & Super (1996)¹⁵⁾によれば、大学生の時期はキャリア発達における探索段階であるが、余暇活動やアルバイトなどを通して自己吟味や役割試行をおこなうと同時に、労働市場の実体験や実習などによる専門性訓練で自己概念の充足と現場への配慮がなされる移行期として位置づけられ、職業に対する好みが特定されてくる時期であるという。一方、Gelatt (1989)²⁾は、変化が激しく予測困難な現代の労働環境において、探索で得られる情報は限定的で主観的なものであり、意志決定は既存の目標に接近するだけでなく新たな目標を創造する過程でもあっていると述べている。つまり、大学生はそれ以前の時期に比べ職務の現場に関与する程度が高まり現実的な判断が可能となってくるが、固定的な目標に対して直線的に関わっていくとは限らず、大学生自らが現実を見通したり体験したりする中で、目標の変更や生成を繰り返す柔軟な探索プロセスを歩んでいくと考えられる。

3. 新たな研究枠組みの必要性

経済状況や社会状況など環境要因の急激な変化が生じやすい現代において、大学生の適性に応じたキャリア探索の方向づけを提供するのは容易ではない。中村 (2007)⁹⁾はキャリア発達に関する心理学的理論を概観したうえで、人の適性など内的要因と、社会状況などの環境的要因との一致を目指す職業心理学の基本的モデルに対しては多くの研究者がその不十分さを指摘しており、その背景として、要素に分解して個々の明確な関係性を理解していこうとする従来の研究手法とは異なる、新たな発想や概念が必要であるという認識の広がりがあることを述べている。そしてカオス理論をキャリアカウンセリングに応用することを試みており、この場合、キャリアに影響する要因の複雑さや、僅かな条件の違いが結果の大きな差を生み出す非線形性、あるいは非予測性を考慮することが可能となり、従来の心理学における予測方法としての演繹的思考や帰納的思考とは異なる蓋然的思考による問題解決や、創発性としてのメタファー、個々の行動を越えたマクロレベルでパターン化されている収束の様式(アトラクタ)の活用が考えられることを述べている。この試み自体は概念的なものであり、具体的なカウンセリングでどのように適用していくかが明示されているわけではないが、研究で得られた知見をキャリア探索支援にどのように活かしていくべきか、という観点からは示唆に富む発想である。すなわち、キャリア探索への支援を必要とする大学生に、研究データ上で明確な関係にある要因を示すだけでなく、関係がやや不明確であったとして

も、そこから新たな可能性や気づき、発見を促す活かし方のほうが大学生自身の柔軟な探索プロセスに合致しやすいと考えられる。

データに基づいた発見促進の理論や技法の開発については、大澤幸生が2000年より提唱した「チャンス発見学」をあげることが出来る。大澤(2003)¹³⁾によれば、チャンスとは「意志決定において重要な判断材料となる事象・状況、またはそれらについての情報」であり、チャンス発見とは「これから新たに何かをやらうとする判断のきっかけを見つけようとする」ことである。大澤(2006)¹⁴⁾ではチャンス発見の3つの原理が示され、「原理1 チャンス発見は環境の諸要素間の相互作用プロセスから実現される」、「原理2 チャンスは準備された環境に到来する」、「原理3 環境はいくつかのコンテキストを含み、チャンス発見にはそれらコンテキスト間の相互作用を活性化するためコンテキスト間を連結する橋のような要素を見い出すことが必要となる」とされた。これらを大学生の進路探索に適用すると、大学生が進路探索する上でイメージされる様々な概念、例えば、「大企業」、「高給料」といった環境的要因や、「自信」、「内向的」といった内面的要因などは相互作用しながらいくつかのコンテキストを形成し、これらコンテキスト間をつなぎ相互作用を活性化させる要素を見い出すことが、進路探索から具体的な進路を絞っていくチャンス発見となる、と想定される。

チャンス発見のツールとして、大澤(2003)¹³⁾はKeyGraph(構造計画研究所)というソフトウェアをあげている。KeyGraphは文書からキーワードを抽出する目的で作成され、語の共起グラフの分解・統合操作によってキーワードを抽出する(大澤・ベンソン・谷内田, 1999)¹²⁾。大澤(2006)¹⁴⁾ではネットワーク理論を導入し、テキストマイニングの形式で得られた語をその共起性の結びつきからKeyGraphを利用していくつかのネットワークのかたまり(島)と、それらの連結(橋)を分析し、可視化させる手法を示した。各島が独自のコンテキストを有するシナリオとして、それらのネットワークも含めて多様な可能性が解釈されチャンス発見のきっかけとなる。KeyGraphで可視化されたネットワーク図においては、各キーワードがネットワークの要素(ノード)であり、黒ノードで示されるものが分析データ中で高頻度に出てくるキーワード、赤ノードで示されるものが高頻度には出てこないが高頻度で出てくるキーワードのつながりと強い関係をもつキーワード、そして黒ノードもしくは赤ノードの外側に緑色の二重円がかかった緑ノードが、ネットワークのつながり方(リンク)におけるネットワーク上でのキーワードとして評価された言葉となる。またつながり(リンク)を示す橋は、言葉の共起性が高くキーワードとして取り上げる序列の近い言葉同士が実線で結ばれ、共起性がやや弱いか序列がやや遠い言葉同士は点線で結ばれる。

4. 本研究の目的

宮下(2010)⁸⁾は、現代大学生のキャリア発達の問題点として「自己吟味の欠落」、「頻繁な志望変更」、「資格至上主義」、「フリーター志向」、「新入社員の未定着」、「チャンスを待つ力の欠如」および、一部の学生ではあるが罪悪感が欠如しているという意味での「モラル・マナーの欠如」をあげている。これらは言い換えれば「安直さと未熟さ」と言えるであろう。渡辺・宗野(2012)¹⁶⁾では大学

新入生の精神的健康の研究において、こうした大学生の心性に関して被影響性の高さという見地から考察している。こうした特徴は、大学全入時代とも言われるようになり学生の質的幅が拡大してきていることが要因の一つとして考えられるが、であるからこそ経済的、社会的に変動の激しい現代においてより柔軟な進路探索を促す新たな方法を検討していく必要がある。本研究ではチャンス発見学の考え方を大学生の進路探索に取り入れ、進路探索期にある大学生が自分の進路についてどのような価値観やイメージをもっているのかを、KeyGraphを用いたキーワード分析により検討する。さらにその結果から、進路探索促進の柔軟な発想法についての提案を試みる。

Ⅱ. 方 法

1. キーワード選択のための提示刺激語(バスケット)の作成

キーワード分析のための調査に先立って、調査対象者にキーワード選択を求める提示刺激語(バスケット)の収集をおこなった。

2016年4月下旬、3年次開講である心理学関係の授業において、「進路や就きたい職業のことを考える時、思い浮かぶことや気になることをキーワードで5個以上書いてください」と伝えて、配布用紙に無記名で自由記述を求めた。その際、進路探索に関する研究活用の説明に加え、回答の有無や回答内容が授業の評価に関係しないが、回答されたデータを今後の授業の中で教材としても用いるので協力して欲しいことも伝えた。実施は当日の授業の最後のところでおこなわれ、実施時間は10分程度であった。後日のこの授業で、心理データ収集と分析の例として解説をおこなった。

回答は当日受講者34名のうち32名から得られた。記入されたキーワード総数は重複も含めて181語であった。この中から完全に重複する言葉を確認し、さらに意味がほぼ同一である言葉を1語に確定させる作業をおこなった。例えば、「対人関係」や「仲間関係」は「人間関係」として統一させるなどである。

得られた言葉を、内容の類似性によりKJ法(川喜田, 1970)⁴⁾等の手法を参考に分類すると「給与や福利厚生など労働条件に関する言葉」、「上下関係など職場の人間関係に関する言葉」、「資格など職務に関係するスキル獲得に関する言葉」、「努力、やる気など動機づけに関する言葉」、「会話力、自信など内的特性に関する言葉」、「福祉、心理学など専攻領域に関する言葉」、「安定、将来性など職場の安定性や発展に関する言葉」、「結婚、趣味など個人生活に関する言葉」、「友人、親など支援や影響力ある人物に関する言葉」、「心配、ニート、不明など抵抗感や未決定に関する言葉」、「卒業、合格など前提的条件に関する言葉」、および複数の内容に解釈可能な言葉に分類された。この分類枠組みを参考に不足していると思われる言葉を検討した。例えば、専攻領域に関する言葉には「精神障害」や「特別支援」など、より具体的で専門的な言葉を

追加するなどおこなった。さらに調査対象者の専攻領域に限定されない広範な言葉も加える目的で宮城(2007)⁶⁾に示された、キャリア価値分析のためのキーワード等を参考に言葉を変更、追加し、最終的に193語を調査で対象者に提示する刺激語の選択肢(バスケット)として決定した。

2. 調査の実施

1) 調査時期

2016年5月下旬の、2年次開講であるカウンセリングに関する授業において、授業の最後の時間を用いて実施した。調査実施時間は10分程度であった。

2) 調査対象者

大学生65名(男性31名、女性34名)で、年齢は19歳～24歳であった。

3) 調査用紙の構成

A4版用紙2枚からなり、1枚目はフェイスシートとして「進路探索のためのキーワード調査」とタイトルを記し、その下に学年と性別の記入欄を設けた。2枚目にキーワードバスケットとして選択肢の言葉を記し、その下にキーワードとして選択した言葉の記入欄と、アルバイトではない就職活動経験の有無について問う設問と回答欄を設けた。

4) 調査手続き

本研究は進路探索期にある大学生を対象とするため、調査対象者を2年生から3年生前期にある学生と定めた。また、作成したキーワードバスケットの専門用語に関する知識がある程度同一になるよう、単一学科2年次必修の授業で調査をおこなった。対象となった大学生の専攻内容は福祉領域の科目を中心としているが、心理学および障害児教育についても多く学べるようになっていく。

調査用紙を配布後、大学生の進路探索に関する研究であり、学生の進路指導に有益であることを伝え協力を求めた。調査用紙の提出は無記名かつ任意であり、記入内容や提出の有無が授業の評価に影響する事はないが、得られたデータの分析結果については、当該授業でキャリアカウンセリングをテーマとした回に一部を開示し学生の教育にも活用する事を伝えた。

フェイスシートに学年と性別の記入を求めた後、「将来、自分の進路を考えていく上で重視したい言葉(キーワード)を、調査用紙2枚目の言葉の中から10語選んで、必ず重視の程度が高い順に記入欄へ書いてください」と口頭で伝え回答を求めた。なお、質問紙における言葉の配置については、意味内容等が近い言葉が並ぶなどして回答に影響するのを極力避けるため、言葉を別々のカードに書いてそれらを袋に入れて1枚ずつ取り出し配置した。本論末の資料に、調査に用いられたキーワードバスケットの配置を示す。

調査は授業の最後10分程度を用いておこなわれた。また、後日のキャリアカウンセリングに関する授業において本調査の分析結果の一部を紹介した。

Table 1 選択されたキーワードと度数

度数	キーワード
25	収入
18	やりがい 自由
16	コミュニケーション力 安定 幸せ
13	時間 人間関係
11	休暇 将来性 心
10	つながり 趣味 就職
9	資格 自立 生活 勉強 夢
8	楽しみ 結婚 笑顔 努力 友人
7	柔軟性 心理学 能力 福祉
6	カウンセリング ボーナス 愛 家族 環境 興味 関心 経験
5	健康 障害 信頼 対応力 特別支援
5	勤務地 言葉づかい 子ども 自信 人間性 成長 積極性 責任
4	行動 児童 自己理解 睡眠 知識 忍耐 目標 話力
3	スポーツ バランス マナー ユーモア 安心 援助 技能 教員
3	交流 国際 視野 社会貢献 社会福祉 昇給 人間 人生 卒業
3	待遇 大学院 不安
2	ほどほど 協力 教育 教養 近い 経済 公務員 好み 合格
2	思考力 若年者 新しさ 親 成績 専門性 創造力 相性 体力
2	知的障害 地域 適性 独自性 不安定 怖い 普通 分野 勇気
2	憂うつ 理解 理解力
1	あたたかい あたたかさ コミュニケーション チームワーク ニート
1	意志 遠い 格差 学習 観察力 企業 希望 高齢者 思考
1	試験 資質 社会情勢 集中力 出世 情報 親戚 身体障害
1	税金 素直 想像 相談 大学 挑戦 都市 年齢 発展 病院
1	不明 雰囲気 文章力 偏見 保育所 面接 幼稚園 理不尽

Ⅲ. 結果

調査対象者から得られた回答について、1名は回答量不足のため、2名は就職活動期である4年生であったため進路探索期を対象とする本研究の主旨から外れると判断し、以後の分析から除外した。なお、アルバイト以外の就職活動経験を有する者は確認されなかった。

1. 選択されたキーワード

キーワードの選択肢(バスケット)より選択されたキーワードを、度数ごとにTable 1に示す。キーワードとして1回以上選択された言葉は146語あり、バスケット全体のおよそ76%におよんだ。調査においてキーワードは、進路探索で重要度の高い順に10語選択されたが、そのうちの1番目の選択から5番目の選択までで頻度の高かった言葉の上位3つ(ただし5番目の選択では度数が同数となった10個)をTable 2に示す。Table 1とTable 2を比較すると、全体の度数が多かった「収入」や「自由」が高い選択順位で高頻度に出現している一方、「やりがい」は出現が見られず高頻度の出現語でも出現パターンが異なることが示された。

Tab b2 選択されたキーワード重要度上位5番目までの言葉と度数(かっこ内は度数)

選択順位	選択されたキーワードと度数
1番目	収入(6) 自由(6) 幸せ(5)
2番目	収入(5) 自由(3) 勉強(3)
3番目	コミュニケーション力(4) 休暇(4) 就職(4)
4番目	収入(4) 将来性(3) 人間関係(3)
5番目	つながり(2) 安定(2) 楽しみ(2) 環境(2) 趣味(2) 収入(2) 教職(2) 心(2) 心理学(2) 人間関係(2)

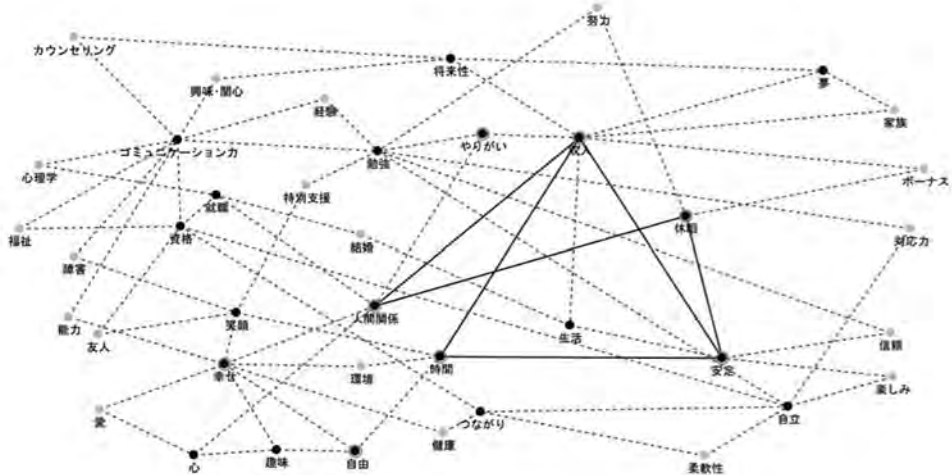


Figure 1 キーワード 40 語のネットワーク図

2. KeyGraphによる、キーワードの共起性に基づくネットワークの分析

KeyGraphにおいて、ネットワークのノードとなるキーワード間の結びつきを決定する共起度はJaccard係数により計算される(大澤, 2006)¹⁴⁾。ノードとして採用するキーワードの出現度数に絶対的な基準は存在しないが、ある程度の度数は必要である。また、進路探索における価値観やイメージとして解釈可能なネットワーク構造を得る必要もある。そこでTable 1 の度数 2 以上のキーワードからKeyGraphによる分析をおこない、度数の最低数を上げながら解釈可能なネットワークを見出していくこととした。その結果、度数 6 以上のキーワード 40 語によるネットワークにおいて解釈可能となった。この条件によるネットワーク図をFigure 1 に示す。図中、濃い黒で示されたノードが高頻度のキーワード(KeyGraphの黒ノード)、灰色で示されたノードが高頻度のキーワードと強い関係をもつキーワード(KeyGraphの赤ノード)、そして黒と灰色の二重円で示されたノードがネットワークのつながり方(リンク)におけるキーワードとして評価された言葉(緑ノード)を表している。また、実線は共起性が高くキーワードとして取り上げる序列も近い、すなわち進路探索における重要性として類似のキーワードのリンクであり、点線は共起性がやや弱いか序列がやや遠いキーワード、つまり実線ほどの結びつきはないが進路探索における重要性としては類似の傾向にあるキーワードのリンクである。

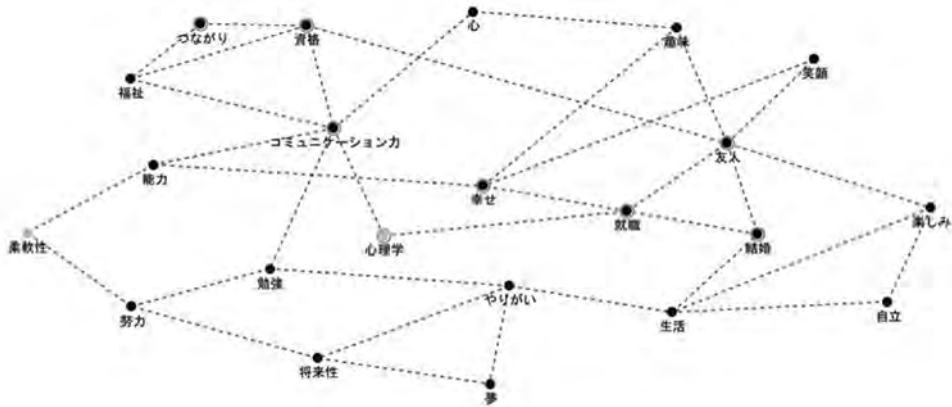


Figure 2 キーワード 22 語のネットワーク図

Figure 1 より、進路探索の価値やイメージとして「収入」、「休暇」、「安定」、「時間」、「人間関係」が実線で結ばれており(島)、これらキーワードが表すシナリオが中核的に存在することが分かった。そしてそれらを補強するような形で他のキーワードが相互に弱く結びついている。そこで、ネットワーク構造の柔軟かつ発展的解釈を可能とするため、中核である実線の島に含まれるノード5つを除外した 35 語を用いて改めてKeyGraphにより分析した。最初の分析と同様に度数の最低数を上げながら解釈可能性を検討した結果、度数 7 以上の 22 語によるネットワークにおいて解釈可能となった。この条件によるネットワーク図をFigure 2 に示す。

Figure 2 では、「やりがい」、「コミュニケーション力」、「幸せ」など度数としては高かったキーワードも含まれている。Table 2 を考慮するとこれらは進路探索における重要度の点では個人差が大きかったことが推測されるが、中核である実線の島を支える補助的概念に弱い結びつきで広く関与していることが示唆される。例えば「コミュニケーション力」は「福祉」、「つながり」、「資格」で弱く結びつく概念とリンクしており、同時に「能力」、「努力」、「勉強」、「柔軟性」と弱く結びつく概念を構成していると解釈出来る。一方、「幸せ」はFigure 2 の右側にある「趣味」、「友人」、「楽しみ」、「自立」、「生活」、「結婚」、「笑顔」で構成される大きな島の一部と解釈出来る。

IV. 考 察

1. 進路探索における価値やイメージの構造

Figure1 より、進路探索における価値やイメージは、「収入」、「休暇」、「安定」、「時間」、「人間関係」が、重視したいことの中核として構成されていた。他に実線で示された島は抽出されなかったことから、少なくとも今回調査対象となった大学生が、進路探索で重視したいことに関して共通性

の高い価値やイメージを有しているということが言える。抽出された中核的キーワードを個々に見ていくと、「収入」は実線のリンク以外に「将来性」、「やりがい」、「夢」、「家族」、「ボーナス」、「生活」が点線でリンクしており、収入をなるべく得たい願望と自身の生活や家族を養う必要性を象徴しているものと解釈出来る。「休暇」は「人間関係」、「安定」と「ボーナス」がリンクしており、雇用条件として適切な休暇がとれること、同様に「安定」は職場、私生活両面での安定、「時間」は職務での束縛をなるべく減らしたい願望、「人間関係」は職場での良好な関係への願望を象徴していると解釈出来る。これらをまとめると、私生活を豊かに送りたい、そのための経済的、時間的余裕を保ちたい側面と、職場での人間関係を中心とするストレスは避けたい、働きやすい環境で穏やかに仕事をした側面から構成されていることが考えられる。

この結果は、平成 28 年度 新入社員「働くことの意識」調査(日本生産性本部, 2016)¹⁰⁾の結果において、新入社員の働く目的として「楽しい生活をしたい」意識の増加、「仕事よりも私生活を優先したい」意識の増加、会社選択理由として「仕事が面白い」という理由の減少が指摘されていることと整合性がある。職業生活において出世などの成果や仕事の面白さを強く求めず、一方で職場での人間関係は良好でありたいという意識は、近年のブラック企業への注目などからくる、企業で主体的に働くことへの疑念や小学校から見られるいじめの深刻化などに、進路探索期から就職期にある現在の若者達が晒されてきたことに一因を求めることが出来るかもしれない。

実線でリンクされた中核的概念を支えている点線のリンク群内(Figure 2)では、KeyGraphでネットワーク上でのキーワード(黒と灰色の二重丸ノード)として選択されたのが「つながり」、「資格」、「コミュニケーション力」、「友人」、「心理学」、「結婚」、「就職」、「幸せ」であった。この中で「コミュニケーション力」と「友人」はリンク数が多く、「コミュニケーション力」は「能力」、「勉強」、「資格」などと直接リンクされていることから、大学生が身につけていくべき能力の1つとして認識している可能性がうかがわれる。また、「友人」は「趣味」、「楽しみ」、「笑顔」、「結婚」との直接リンクから、私生活の充実や支えと関連づけられる傾向がある。しかしながらFigure 1を見ると、「コミュニケーション力」はFigure 2と同様に多くのリンクを有し、身につけていくべき力と解釈しうるリンクであるが、「友人」はリンク自体が大きく減少している。その一方で「幸せ」はリンクが大きく増えており、さらにKeyGraphでネットワーク上でのキーワードに指定はされなかったが「勉強」もFigure 1ではリンクが大きく増えている。これらより、大学生が職務に関係するコミュニケーション力の足りなさを、人によりその重要度に差はあるが共通に感じており、それは大学での学びとともに身につけていきたいと感じていること、友人関係は職務とは切り離れた私生活においてより大きな意味をもってくこと、および勉強することは進路探索における中核的概念と関連するが、勉強による大学での具体的な学びと、「自立心」、「対応力」など職務の土台となる抽象的能力とを結びつけそこから間接的に影響するものであると解釈出来る。

2. 進路探索促進への応用

野田・渡辺(2008)¹¹⁾は大学1, 2年生を対象として、高校時代の進路探索経験が将来の進路選択期待におよぼす影響について検討した。その結果、高校時代に感じていた進路選択に対する自信の高さに関わらず、進路探索活動を実際におこなうことで将来の進路選択に関する期待が高まることが示唆され、これは進路探索活動を促す教育的支援の有効性を支持するものである、と結論づけた。この研究は高校から大学へ移行する時期での研究ではあるが、大学からその後の進路選択に向かう時期でも当てはまるものと考えられる。宮城(2002)⁷⁾はキャリアカウンセリングの立場から日本の高校、大学における進路指導が卒業年次に偏っていることを指摘し、キャリア選択の必要条件として「自己理解」、「豊富なキャリア・職業・進学情報」、「主体的な意志決定」をあげている。近年は学校教育におけるキャリア教育の重要性が認識され、高校、大学とも早期の進路指導がおこなわれるようにはなっているが、自己理解と意志決定をいかに促進させるかがいまだ課題であると考えられる。

すでに述べたように現代の大学生の特徴として「安直さと未熟さ」、あるいは経済、社会など環境要因からの被影響性が高いことがあげられるとすれば、直感的に理解させる手段と、理解が一時的ではなく持続する、あるいは新たな発見に結びつく見通し(パースペクティブ)を生み出させる支援が必要であろう。KeyGraphによるネットワーク図の出力はキーワード間のつながりを明示し、島や橋の見方により直感的なゲシュタルトによる理解が可能である。進路探索に関して直接得られたデータに基づき構成されたネットワーク図を示し、その意味を大学生に説明するだけでも、進路に関する様々な情報を学生自らが直感的に理解し整理することにつながるであろう。また、進路に関する様々な情報の関連性を見出して大学生自らのやるべきことを創出することも可能となる。例えば、Figure 1で「コミュニケーション力」がネットワーク上でキーワードとなっていたが、KeyGraphで分析するまでもなくコミュニケーション力については現代の労働市場において重要な能力であるとされている。進路探索期にある大学生自身もその認識があるから重要度の高いキーワードとなっているとさえ言えるが、「コミュニケーション力を鍛えなさい」と大学生に指導したところで、その必要性は分かるものの、何をどのようにすればどんな成果に結びつくのかという見通しは持ちにくいと思われる。この点に関して本研究でKeyGraphから得られた解答は、「専攻領域の知識や技術と関連する能力、例えば障害や困難を抱えた人達と関わる力として多くの人が重視しているものであろう。したがってこの能力は大学での学びで得ていけばいいものである。身につけることで職務への自信ややりがいを感じる事が出来て、さらにその結果として働きやすい職場や安定した生活とも結びつきやすくなるだろう。」と解釈出来る。もちろんコミュニケーション力自体には個人差があり、引込み思案であるなど基本的コミュニケーション力に不安を抱えているために重要度が高い場合もあるであろう。この場合には多くの人は専門的技法としてのコミュニケーション力が課題となるが、それとは別に基本的コミュニケーション力を高めていく必要性に気づかされて新たなパースペクティブが創出されていくことになる。金井(2015)³⁾は、パースペクティブを持つために、今は出来なくて

もいつかは出来るようになる、といった効力感をサポートすることの必要性を述べており、ネットワーク図による直感的理解から大学生自らのやるべきことを創出、さらにパースペクティブを生成するには、支援する側が進路探索で生じる不安や疑問をよく理解し、必要に応じて別の見方や新たな情報を提示するなどの工夫も必要となる。

V. 今後の課題と展望

本研究では、進路における専門領域についての精緻性をある程度統制する目的から、単一の学科で得られたデータを用いた。その上で進路探索期にある大学2年生～3年生前期の学生に関する分析をおこなったため、少ないデータから価値やイメージの構造を解釈している点は否めない。KeyGraphで抽出された中核的なキーワードは必ずしも学科の特徴に依存していなかったが、今後データ数を増やす、異なる専攻領域のデータを比較する等の工夫が必要である。また、今回のキーワード共起条件は進路探索における重要度の次元で設定されたが、進路探索からの連想や進路探索における不安など、別の次元も想定される。比較検討することで進路探索の価値やイメージの構造をより詳細に調べることが可能となるであろう。これらを踏まえてKeyGraphを用いた実際の進路探索支援をおこない、その有効性検討に繋げていくことが必要である。

〈引用文献〉

- 1) 安達智子：若年層のフリーターに対する肯定的態度の構造と規定要因，実験社会心理学研究，Vol.47, pp.39-50, 2007.
- 2) Gelatt,H.B.:Positive uncertainty : A new decision-making framework for counseling. Journal of Counseling Psychology, 36, pp.252-256, 1989.
- 3) 金井篤子：ライフ・キャリア構築，下山晴彦他(編)，臨床心理学，Vol.15, No.3, 金剛出版，pp.313-318, 2015.
- 4) 川喜田二郎：新・発想法 KJ法の展開と応用，中公新書，1970.
- 5) 厚生労働省：若年者雇用対策，大学等卒業者の就職状況調査，
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jakunen/jakunensha-houdou.html, 2016/11/7
- 6) 宮城まり子：心理学をまなぶ人のためのキャリアデザイン，東京図書，2007.
- 7) 宮城まり子：キャリアカウンセリング，駿河台出版社，2002.
- 8) 宮下一博：大学生のキャリア発達 未来に向かって歩む，ナカニシヤ出版，2010.
- 9) 中村 恵：新しい潮流-カオス理論の応用-，渡辺三枝子(編著)「新版 キャリアの心理学」第10章，ナカニシヤ出版，p199-208, 2007.
- 10) 財団法人 日本生産性本部：平成 28 年度 新入社員「働くことの意識」調査結果，
<http://activity.jpc-net.jp/detail/lrw/activity001478.html>, 2016/11/11
- 11) 野田理世，渡辺由己：高校時代の進路探索と将来の進路選択期待の関係，吉備国際大学社会福祉 学部研究紀要，Vol.13, pp.109-114, 2008.
- 12) 大澤幸生，ネルスE.ベンソン，谷内田正彦：KeyGraph:語の共起グラフの分割・統合によるキーワード抽出，電子情報通信学会論文誌，J82-D1, No.2, pp.391-400, 1999.
- 13) 大澤幸生：チャンス発見の情報技術，東京電機大学出版局，2003.
- 14) 大澤幸生：チャンス発見のデータ分析，東京電機大学出版局，2006.
- 15) Super,D.E., Savickas,M.L., & Super,C.M.:The life-span, life-space approach to careers. In D.Brown, L.Brooks, & Associates(Eds.): Career choice and development(3rd ed.) San Francisco : Jossay-Bass. pp.121-178,1996.
- 16) 渡辺由己，宗野恵子：UPIの特徴から見た，大学新入生の精神的健康に関する研究 2 -症状群ごとの検討-，吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要，Vol.9, pp.39-48, 2012.-

資料 調査で用いたキーワード選択のためのバスケット

福祉 教育 試験 勉強 思考力 地域 面接 介護福祉 施設 公務員
 就職 将来性 経済 人生 環境 時間 普通 独自性 継続 安心 怖い
 楽しみ 人間関係 バランス 言葉 障害 乳児 情報 下積み 言葉づかい
 学校 資格 精神保健福祉 子ども 学習 社会福祉 観察力 近い 活動
 目標 収入 生活 社会情勢 残業 出世 適性 積極的 不安 重要
 好み 交流 心 身体障害 ほどほど 感情 調べる 人間 年齢 マナー
 特別支援 合格 知識 理解力 遠い 援助 内容 夢 昇給 育児 競争
 睡眠 企業 自己理解 消極的 困難 笑顔 考えない 関わり方 結婚
 心理学 幼児 精神障害 自立 保育所 態度 知的障害 対応力 場所
 職種 想像 待遇 相談 病院 老後 健康 意志 愛 作業所 容易
 理不尽 幸せ 協力 保育 教員 児童 就労 幼稚園 能力
 コミュニケーション力 勤務地 格差 希望 ボーナス 家族 休暇 動機
 人間性 憂うつ あたたかい 新しさ 信頼 専門性 事務 カウンセリング
 中学校 経験 集中力 交通 偏見 やりがい 税金 親 自信 体力
 大変 つめたい 雰囲気 チームワーク 分野 成人 サービス 高校
 挑戦 話力 ニート 興味・関心 きょうだい 素直 勇気 明確 相性
 高齢者 大学 ユーモア 文章力 失業 発見 親戚 責任 努力 不明
 友人 若年者 専門学校 創造力 無職 成長 忍耐 自立 決定
 つながり 大学院 視野 性格 未決定 理解 卒業 行動 教養 柔軟性
 安定 承認 成績 技能 不安定 国際 社会貢献 都市 発展
 スポーツ 趣味 自由 コミュニケーション